

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：32704

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K23208

研究課題名(和文) 都市部に暮らす独居高齢男性のがんの妻との死別後の「生活の再構築」プロセスの解明

研究課題名(英文) Lifestyle reconstruction of older men living alone in urban areas following the death of their wives

研究代表者

森實 詩乃(Morizane, Shino)

関東学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：70583954

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：人口100万人以上の都市の死別後のサポートを行っている事業所へ研究協力を郵送依頼した。返信があった事業所経由で対象者にアクセスし70歳～80歳代の男性計3名に半構造化面接を実施。M-GTAで分析した。結果は、後期高齢男性は【日々の暮らしの中での先行きの不安】や【妻亡き後に「死」について考える】が、今後の自分の生活において前向きに捉えていた。前期高齢男性は【得意とまでいかなくても一人でこなせる家事もある】。とりわけ団塊の世代以降の男性は【新しいことへのチャレンジも恐れない】で【あえて予定をたくさん入れることで妻の死後の悲しみを乗り切ることに努める】。3名共通するのは仕事を持ち社会参加できていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

団塊世代は、社会学の視座では、1970年代「ニューファミリー」と言われた戦前の世代とは違う価値観を持つ世代である。本研究で得られる知見は、世代の違う高齢者への関わり方や訪問看護経験の少ない看護師や若手世代の看護師にとって、訪問看護ケアの受け手の思いや希求に添って適切なケアを行い、対象者との関係性を構築することに資すると考える。高齢男性の配偶者との死別後の生活においての体験やグリーフワークがどのように進み、生活が再構築されたのかそのプロセスを明らかにすることでグリーフケアにおいて新たな知見を得られたり、都市部に暮らす独居高齢男性の孤立化や孤独死予防の一助となりうる。

研究成果の概要(英文)：The survey was mailed to home health care agencies that provide post-bereavement support in cities with populations of one million or more. Access to the target population was provided to men who were referred by the responding offices. Semi-structured interviews were conducted with three men in their 70s and 80s, based on an interview guide. Interviews were transcribed verbatim and analyzed by M-GTA. Late-olderly men [anxiety about the future in their daily lives] and [thinking about "death" after the death of their wives] were viewed positively in their future lives. Men in the last quarter of their lives [can handle some household chores on their own, even if they are not good at them]. Men, especially after the baby-boom generation, are [not afraid to take on new challenges] and [strive to survive the grief after the death of their wives by daring to make a lot of plans]. The three olderly men had one thing in common: they had jobs and were able to participate in society.

研究分野：在宅看護学

キーワード：独居高齢男性者 グリーフケア グリーフワーク 死別 団塊の世代

都市部に暮らす独居高齢男性のがんの妻との死別後の「生活の再構築」プロセスの解明

The "rebuilding of life" process of an elderly man living alone in an urban area after the bereavement of his wife with cancer.

1. 研究開始当初の背景

配偶者の死別に関する先行研究は、男女対象であるか、女性が多い。背景として女性の平均寿命が長く、死別の可能性が女性高齢者に多いためである。女性に比べ、男性は「立ち直れない」者が多いことや孤独感が高いという指摘もあり、男性対象の研究は少ない。多くの夫婦は、夫が先に逝くことを前提に生活設計を立て、配偶者に先立たれた場合、残された高齢男性の多くが身の回りの処理が自分で出来ず、生活の運営が難しくなることが指摘されている¹⁾。国内では都市部の高齢男性は企業に雇用され労働者として長距離通勤・労働をしてきた為に、家族や地域との関わりは乏しく社会的孤立や孤独死を招きやすい²⁾。また海外でも妻と死別1年程度で早逝するという報告もある³⁾。がん患者の家族の場合は、死への心の準備ができていないと、遺族となってから精神状態が良好という報告や療養生活開始～終末期までに家族への訪問看護によるグリーフケアがされていけば、死別の影響による病気や死亡の予防に繋がるという研究はある⁴⁾が、高齢男性が死別後どのように生活を再構築していくかについての論文は国内外において見当たらない。研究者は、博士論文において、高齢男性が、がんの妻と死別後どのように独居生活を再構築していったのかそのプロセスを明らかにした。関東ブロックに住む高齢男性8名への半構造化面接を行い、分析した結果、がんの予後告知を受けた妻から高齢男性へ家事役割の引継ぎなどされたケースもあり、妻への看護のため訪問する看護師達も、生前グリーフケアと並行し、死別後の生活を見据えた関わりを行い、高齢男性の支えとなっていた。加えて世代によっても生前の生活の仕方や死別後の生活の再構築に至るまでのプロセスに違いがある⁵⁾ことが明らかとなった。団塊の世代(1947～49生まれ)が既に後期高齢年齢に達し、更に高齢化は進む。戦後生まれの団塊世代は、社会学の視座では、1970年代当時「ニューファミリー」と言われた戦前の世代とは違う価値観を持つ世代である。各世代別に看護の対象を理解した上での訪問看護師の関わりは、さらに重要視されることとなる。本研究で世代の違いによって得られる知見は、訪問看護経験の浅い看護師や若手世代の看護師にとって、訪問看護ケアの受け手の思いや希求に添って適切なケアを行い、対象者との関係性を構築することに資すると考える。高齢男性の配偶者との死別後の生活においての体験やグリーフワークがどのように進み、生活が再構築されたのかそのプロセスを明らかにすることは、エンド・オブ・ライフケアやグリーフケアにおいて新たな知見となる。また都市部に暮らす独居高齢男性の孤立化や孤独死予防にもつながり、高齢者のウェルネスを目指した支援の一助となると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、都市部に住む60～80歳代の各世代の高齢男性を対象とし妻の生前-死別-独居という時間経過の中でどのように「生活の再構築」をしていったのか、そのプロセスを明らかにし、妻の生前から訪問看護師が介入するグリーフケアへの示唆を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

1)研究期間：2021（令和2）年4月～2023（令和5）年3月31日

2）研究対象：都道府県に登録している訪問看護ステーションのうち HP 上で、所在地を挙げている人口 100 万人以上の都市にある訪問看護ステーションおよび看護小規模多機能型居宅介護事業所で家族会や遺族会、などで死別後の サポートを行っている事業所に郵送にて研究協力依頼した。対象者は、返送のあった事業所から推薦があり、看取り期間が 3 ヶ月以上あり、妻と死別後 3 ヶ月以上経過している 同意を得られた高齢男性遺族とした。

3）倫理的配慮：実施状況については、2020 年 12 月研究計画書および関連書類 を提出し、倫理審査申請を行った結果、要徴修正であった。修正後、2021 年 1 月承認を得た。コロナ禍であったため、研究協力者が得られにくい状況があり、調査期間延長や面接方法の変更など一部変更し、2022 年 2 月関東学院大学「人に関する研究倫理審査委員会」より再度、承認を得た。（承認番号：H 2020-4-2）

4. 研究成果

人口100万人以上の都市で死別後のサポートを行っている事業所へ郵送依頼した。2021年5月に300通、2022年4月に300通を追加郵送した。返信があった事業所経由で対象者にアクセスし70歳代・80歳代の男性計3名に半構成的面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析した。分析対象者は都市部に暮らすがんの妻と死別した高齢男性、分析テーマは「都市部に暮らすがんの妻と死別した高齢男性が、死別後の生活を再構築していくプロセス」とした。

研究結果をストーリーラインで以下に示す。

がんの妻の在宅療養開始時期の高齢男性は、《妻のがんの発見や治療選択への後悔》しながら、食事・排泄介助の大変さについて介護を始めてから実感していた。自分自身が、体調を崩したり、妻の状態が悪化したり、介護中も様々なトラブルが起こるが、《介護を苦に思わない夫》もいた。生前、妻から役割分担されて家事をしている高齢男性もいた。

家計管理や近所付き合いや自治会活動が年々大変となるなど日々の暮らしの中での困りごとはあり、死別後妻のありがたさに気づく。しかしながら、前期高齢男性では、得意とまでいかなくても一人でこなせる家事もある ことがわかった。

妻の死後の高齢男性は、先行研究同様に、喪失による悲嘆プロセスをたどるが、落ち込む自分を鼓舞したり、訪問看護師や周囲の同年代の男性からの情報提供や自らが《社会参加の必要性に気づく》高齢男性もいた。

妻の死後の事務的な諸手続きは、速やかに行うが、各家庭の事情によって故人の供養の仕方に違いが見られた。都市部の住宅スタイルや墓事情などで納骨しない、法要も行わないという高齢男性と、反対に法要は各忌で行い《子どもや孫世代に継承していくべきことと捉える》高齢男性もいた。死別後、妻亡き後の後悔や妻への思慕はあるが、時間の経過に伴い、高齢男性自身が、《自分がしたいと思うことに取り組む》ようになっていた。新しいことを恐れない で、チャレンジしようとしたり、家事も手抜きする術を学ぶようになっていく。悲嘆のプロセスをたどるが、徐々に《自分の生活に目が行く》ようになり、妻不在の生活を構築しようとしていた。

5. 考察

1) 長年のスタイル維持にこだわらない

団塊世代以降の高齢男性世代は、新しいことを恐れず、時間の経過に伴い、高齢男性自身が、《自分がしたいと思うことに取り組む》ようになっていた。先行研究では、妻と死別した高齢男性の日常性構築の滞りに 長年のスタイル維持 の信念を固持し、【もてる資源】が充足してないこと [生活変化への直面] している時間が長く、[内にこもる] 状態が続くという報告⁶⁾もあるが、本研究では、自らが築き上げた人間関係も本人の持つ力やこれまで【培われた生活力】⁶⁾として活用しつつ、新しいことを恐れない で、《自分がしたいと思うことに取り組む》ようになっていた。

2) 日本従来 of 法要に対する考え方

高齢男性は、妻との死別後、従来日本で行われてきた故人の見送りを 区切りとしての葬送儀礼 として、死に関わる儀礼や慣習は亡き妻のためだけではなく、悲嘆過程や生活の区切りに大きな意義を持っていた⁶⁾が、都市部の住宅スタイルや墓事情も踏まえると、本研究では、宗教をはじめ、法要や墓への埋葬にこだわらず行わない家庭もあることがわかった。同年代の高齢男性であっても、葬送儀礼をこどもや孫へ継承していきたいと考える者と個人の死生観によって相違が認められた。

3) 家事役割の滞りない引継ぎ

本研究では、共働きで生前から妻と家事の役割分担をしていた高齢男性もいた。また妻の闘病中、妻から家事の手ほどきを受けつつ介護をしている高齢男性もいた。

妻の死後、光熱費等の支払い方法がどうなってるか家計について 3 名共にわからずしばらく困っていた。日本における平均寿命を鑑みれば、女性の方が長寿という想定で暮らしているため、妻の死後、家計について困る高齢男性もいる。家事が未経験だった人への配慮は、広瀬⁷⁾によって既に報告されている。情動面での死別の準備だけでなく、行動面での死別の準備も必要⁸⁾であることが明らかになった。高齢夫婦の場合、互いに健康であるときから家事役割が滞りなく引き継がれ生活できるような支援の必要性が示唆された。

4) 死別後の生活の再構築へのきっかけ

妻と死別した夫は、死別後 1 年間の中で一歩踏み出す時期があるとされている⁶⁾。研究者の先行研究では、《自分の体の健康維持のため、変化に気づき改善策に取り組む》高齢男性がいた。本研究でも死別後半年経過した高齢男性への調査で友人や知人から社会参加を促されたり、自分の生活に目が行くようになる時期が認められた。喪失による悲嘆プロセスを辿りながらも妻と死別後の高齢男性は、妻不在の生活を構築しようとしていた。

5) 訪問看護ケアへの示唆

本研究では、妻との死別後、自ら社会参加をする高齢男性も見られた。配偶者を失った高齢男性が孤立化せず、健康に過ごすために、先行研究同様「誰かとつながっている」こと、コミュニティへの参加が必要と考える。どこにアクセスすればよいか、誰がその役割を担う人か、情報難民とならないよう妻への訪問看護終了後であっても情報提供や媒介者としての訪問看護師の存在も必要であろう。

6)研究の限界と課題

本研究は研究対象者が3名であるため、団塊世代の高齢男性の全体を捉えられていないことには限界がある。加えて人口100万都市にある訪問看護ステーションへの協力を求めたが、コロナ禍において移動の制限もあり、研究参加協力を得られ難い状況であった

今後も、継続して団塊世代を中心とし世代の違う高齢男性への調査を課題番号：22K17557の研究でも進めていく予定である。

6 . 結論

・情動面での死別の準備だけでなく、行動面での死別の準備も必要であり、家事役割が滞りなく行えるような関わりも必要であることが明らかになった。

・高齢男性が情報難民や孤立化しないように社会とつながっているためにも、知人や友人だけでなく、訪問看護師のような存在も必要であることが示唆された。

【引用文献】

- 1) 杉浦圭子・伊藤美樹子 他:在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討.日本公衆衛生学会誌,57(1), 3-16,2010
- 2) 田高悦子・河野あゆみ：大都市の一人暮らし男性高齢者の社会的孤立にかかわる課題の質的記述的研究.日本地域看護学会誌,15(3),4-11,2013
- 3) Javier Espinosa： Heightened mortality after the death of a spouse： Marriage protection or marriage selection . Journal of health economics, 27(5) , 1326-1342,2008
- 4) 中島聡美:がん患者・家族のストレスケア がんの遺族における複雑性悲嘆とその治療.ストレス科学,27(1),33-42,2012
- 5) 森實詩乃，諏訪さゆり：都市部においてがんの妻を看取った男性高齢者が生活を再構築するプロセス - 2 事例の分析から -.千葉大学大学院看護学研究科紀要 41,101- 108,2019
- 6) 浅野志保，古瀬みどり がん終末期の妻と死別して独居になった高齢男性の新たな日常性構築プロセス.家族看護学研究, 26(1),14-24 , 2020
- 7)広瀬寛子：悲嘆とグリーフケア . 医学書院，2011
- 8)Randy S Hebert , Richard ,Schulz , et al.:Preparing family caregivers for death and bereavement. Insights from caregivers of terminally ill patients, Journal of pain and Symptom Manage . 37(1), 3-12,2009

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森實 詩乃	4. 巻 29巻6号
2. 論文標題 独居高齢者に対する看護支援「独居高齢男性の妻と死別後のグリーフワーク」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日総研 臨床老年看護	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Shino MORIZANE, Shohei KOGURE
2. 発表標題 Lifestyle reconstruction of older men living alone in urban areas following the death of their wives
3. 学会等名 26th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------